

「アーカイブズとメディアリテラシー」の 授業作り

～何を、どう、効果的に伝えるのか～

Making Classes for “Archives and Media Literacy”

AOSHIMA Ken

青 島 顕

日本語コミュニケーション学科非常勤講師

抄録：

短期大学部本学科で表題の授業を2020年度から担当している。「メディアリテラシー」は大学の授業科目に一般的に見かけるテーマだが、「アーカイブズ」と組み合わせた科目はそれほど多くはないのではないか。この一見して異質な二つのテーマをどう組み合わせ、どう論じたらよいのか。高校卒業後、2年間で社会に出て行く短期大学の学生が、この科目を身につける意義はどこにあるのか。さらに私自身の問題として、新聞記者をやりながら実務家教員として何ができるのか。試行錯誤しながら取り組んだ3年間の授業内容を記録すると共に、授業作りを今後どのように進化させたらよいのかを考察した。

Abstract：

I have been teaching a junior college “Media Literacy” class since FY2020 while working as a news reporter. “Media literacy” is a common theme in university courses, but few courses combine it with “archives.” How can these two seemingly dissimilar themes be combined and discussed? What does this subject offer junior college students after they graduate? And what can I do for students as a news reporter? In this report, I record the contents of my classes for the past three years, and discuss how I would like my teaching style to evolve in the future.

キーワード：メディア，新聞，テレビ放送，記録，公文書

Keywords：mass media, newspapers, television, archives, official document

1. 開講のいきさつ

筆者は毎日新聞記者が本業の実務家教員である。本業で2014年度から「メディア」を担当してきた。マスメディアの在り方を取材・考察するページを受け持ち、たとえば、「取材・報道の自由」の範囲・メディア規制につながる放送法、個人情報保護法、情報公開法、公文書管理法、特定秘密保護法といった法制の行方・書籍などの流通の問題を取り扱ってきた。

かつては「どの新聞を読んでもたいして変わらない」と言われてきたが、SNSの普及をはじめとする社会、政治情勢の変化を背景に、一転して新聞の論調に深刻な分断が生じるようになった。事実立脚すべきマスメディアの大原則が崩壊し、事実そっちのけで持論に入り込む新聞や雑誌も現れている。担当記者としては、事実即しうえで論を展開するという常識を取り戻し、信頼されるマスメディアに資する記事作りに力を注いできた。

また、行政、司法、立法の三権が重要な意思決定についての過程を記録に残して検証可能にし、時の経過とともに、できる限り公開できるようにする社会づくりを目標に活動してきた。ジャーナリストの江川紹子をはじめ、新聞・テレビ記者、研究者、法曹関係者と連携して2017年に「ほんとうの裁判公開プロジェクト」を結成して、憲法の裁判公開原則に則した刑事裁判記録の公開を目指して活動し、『記者のための裁判記録閲覧ハンドブック』（ほんとうの裁判公開プロジェクト）の出版準備をしていた（2020年12月に刊行）。

そんな中、日本語コミュニケーション学科非常勤講師の前任者で、元日本経済新聞社文化部編集委員の松岡資明の退任を受けて、2020年度から前期2単位の授業を引き継ぐことになった。

前年の2019年の春ごろ、松岡から思いがけず非常勤講師として推薦して頂いた。筆者は単著や論文の発表をしておらず研究者活動の実績がない。かなり躊躇したが、新聞記者の現場にいる者が教壇に立たせていただくことで、新聞の現場を学生に理解していただく機会になるのではないかとお引き受けすることにした。

松岡の2019年度の講義テーマが「近現代のジャーナリズム」であったことから、ジャーナリズムの在り方を中心に教えろという趣旨だと受け止めた。ところが本学から与えられたテーマは「アーカイブズとメディアリテラシー」であった。正直途方に暮れた。理由はいくつかある。一つは異質な「アーカイブズ」と「メディアリテラシー」をどうつなぐのか、方策が分からなかったことだ。また、この二つはいずれも一般になじみがなく、学生が科目を選択する際に敬遠される要因になりうることもある。そのうえ、高校を卒業したばかりの学生にこの授業を身近に感じてもらう方策が思いつかなかった。

後に高瀬真理子学科主任（当時）に尋ねたところ、松岡が「これからはアーカイブズを学ぶことが重要だ」と力説していて、「アーカイブズ」を科目に取り入れることを決め、それに「メディアリテラシー」を加えたとのことだった。

そもそも「メディアリテラシー」を教えることは、現役の新聞記者としては抵抗感がある。「メディアが報じる情報を読み解く能力」と解するのが一般的であろうが、それはメディアで働く自分にはね返ってくる問題であり、自身や同僚たちを批判することでもあるからだ。メディア史

研究者・佐藤卓己の『テレビ的教養』には、「青少年保護とテレビの議論で、官の側からメディアリテラシーが必要と打ち出されているのは、本末転倒で要注意だ」（佐藤 2008）とある。マスメディアによる批判に手を焼く官僚や政治家たちが、「新聞やテレビの報道は鵜呑みにするな」と社会に訴えるニュアンスが、メディアリテラシーには込められているとも受け止められる。

もちろん社会のメディア不信の深刻さは否定できない。特に 2011 年の東京電力福島第一原子力発電所の事故を受け、マスメディアが伝える情報ではなく、市民が直接、インターネットで中継される東電の記者会見を視聴し「マスメディアが伝えない情報を得る」動きも起きた。そのころ、元産経新聞記者の日隅一雄弁護士（故人）に「マスゴミ」と言い放たれたこともある。

私の所属する毎日新聞社は第三者機関「『開かれた新聞』委員会」を 2000 年に設置し、委員会から第三者の目による人権侵害の監視や報道への提言を受けている。その後、他の全国紙や有力地方紙にも、常設の第三者機関を設けるところが現れるようになった。テレビ局には放送法に基づく放送番組審議機関、さらにはテレビ業界で設立した「放送倫理・番組向上機構（BPO）」という機関がある。BPO の放送倫理検証委員会は 2022 年、NHK BS1 の東京五輪の公式映画製作過程に密着した番組に虚偽の字幕が付けられたことに対して、「重大な放送倫理違反があった」と指摘した。

マスメディアが依然、社会にとって必要なインフラであることも確かである。取材の訓練を受けた記者が、一般の人の入ることのできない政治、行政、司法などの現場に直接立ち入り、第三者の視点で観察することで、社会的弱者のために必要な情報を提供する役割を担っている。

目を海外に転じれば、インターネットの普及を受けて 2000 年代以降に地方の新聞社が次々に廃業に追い込まれ、「ニュース砂漠」が生じた米国では、目の届かなくなった地方政界で不正が横行していると報告されている。

「メディアリテラシー」の授業作りに立ち返ろう。メディアの仕事、役割、メディアそれぞれの特徴、そして限界を教えることはできるのではないかと考えるようになった。一つの問いは、新聞とテレビの共通点と相違点である。新聞には行政の監督機関がないが、テレビは放送法に基づき総務相による監督を受けている。さらに NHK は予算の審査を国会で受けている。それが政治によるテレビへの介入につながっていることなどを知っておくことは、学生としても、社会に出てからも役に立つのではないかと考えるようになった。自分の知る限りのメディアとの付き合い方、読み方を教えることだって、学生のためになるのではないかと捉えることにした。

では「アーカイブズ」はどうか。東京都内でアーカイブズ学の研究科を大学院に持つ学習院大学の授業を参考にしようと考えた。

元公文書管理委員会委員の保坂裕興・主任教授による学部生向けの「アーカイブズ学概説」（2020 年度）のシラバスによると、授業概要は以下の通りだった。「組織や個人が記録を体系的に作成・使用・保管し、アーカイブズ（記録史料群）を構築して長期にわたり保存・利用しようとする時、アーカイブズのプログラムとその専門職員：アーキビストが必要になる。それらを充実させるための学問であるアーカイブズ学は、記録及びアーカイブズ自体の構造的な理解と、保

存・利用のための管理・実践の理解からなる。この授業では、事例を通して、前者に関する理解を得るとともに、後者に関する原則、仕組み、取り扱い、法制度、アーキビストの仕事と倫理等の基礎について学ぶものとする。これにより、歴史資料の一カテゴリであるアーカイブズの存在を確かなものにするとともに、それを適確に使うための知識と方法を身につける。」(学習院大学 a, 2022) アーカイブズ学の基礎理論を教え、大学院のアーキビスト養成教育への橋渡しの役割を果たす講義である。これは、短期大学の講義としては専門性が高すぎると考えた。筆者自身がアーキビストではないので、教える能力も足りない。

次に、学習院大学の学部生向けの別の科目「記録管理と組織」を参照した。2020年度シラバスによると、授業概要は以下の通りだった。「2011年の東日本大震災では、津波によって市町村の公文書や企業・団体・個人の文書・写真など、かけがえのない記録が大きな被害を受け、改めてその大切さが認識された。さらに昨今の政府の意思決定や企業経営をめぐる続発する不祥事に見られるように、これまで杜撰であった日本の記録管理に対する社会の問題意識は高まりつつある。国、地方公共団体、大学法人、あるいは学生サークルのような任意団体であっても、およそ組織であるからには情報と記録なしには持続的な活動は成り立たず、適切な記録管理(レコードマネジメント)は組織運営の要となる。この授業では、受講者の多くが将来勤めることになるであろう企業や行政機関で、情報や記録がいかに重要な役割を果たしているかを学び、適切な記録管理とはどういうものかを、歴史を踏まえながら考える。」(学習院大学 b, 2022)

また、上記講義の姉妹編として、学習院大の学部生向けに開講している「記録保存と現代」の授業概要の一部についても参考になることがある。2020年度分には以下のように記されている(この授業の1回分を2020年度から私が担当している)。「2011年の東日本大震災では、津波によって市町村の行政文書や企業・団体・個人の文書・写真など、貴重な記録が大きな被害を受け、改めて記録の大切さが認識されました。また近年、ずさんな記録管理が市民の権利や健康、時には生命さえも脅かしている現状が各方面で次々と明るみに出ました。宙に浮いた5000万件の年金記録問題、薬害C型肝炎記録のずさんな管理、老舗食品メーカーの賞味期限改ざんと記録廃棄、築地市場の豊洲移転問題における文書の不存在、〈モリ・カケ・サクラ〉で知られた政府の不適切な公文書管理などです。また、2014年暮れに施行された「特定秘密保護法」をめぐっては、国が保有する記録に対する国民のアクセス権をどう保障するのかについて深刻な議論が巻き起こりました。「記録」や「文書」は歴史の重要な史料であり、記憶を未来に伝えるための大切な証拠であることは言うまでもありません。しかし同時に、「記録」や「文書」は、現代に生きる私たちの人権や生命を守るための、また民主的で平和な社会を作るためのかけがえのない情報資源でもあることが、日本の貧しい「記録保存」問題から逆によくわかるのではないのでしょうか。最近「アーカイブズ」という言葉をよく聞くようになりました。実はこの「アーカイブズ」こそ、歴史資料として重要な、かつ人権を守り民主社会を支える情報資源としても不可欠な「記録」のこと、あるいは、そのための「記録保存システム」のことなのです。いま日本で

は、このような考え方にもとづいて、あらゆる方面でアーカイブズの構築が始まっています。自治体や企業・大学・団体、あるいは理系・文系・芸術系など、分野を問わずアーカイブズは現代社会に不可欠な記憶装置として重要視されつつあります。」(学習院大学 c, 2022)

「記録管理と組織」「記録保存と現代」の両科目の中の比較的取り組みやすい課題を、日々のニュースを参照しながら教えてみようと考えた。さらに、アーカイブズに関連した私自身の記者としての取材とその過程や、取材での成功・失敗についても触れれば、学生がスムーズに課題に取り組めるのではないかと考えた。

2. シラバスと授業作り

各週の授業の構成にあたっては、前任者である松岡の2019年度「近現代のジャーナリズム」も参照した。松岡の授業内容は以下の通りであった。

- 第1週 マスコミ論
- 第2週 ニュースとは何か
- 第3週 新聞記事ができるまで
- 第4週 取材の現場
- 第5週 調査報道
- 第6週 新聞記事の読み方
- 第7週 ニュースを評価してみる
- 第8週 報道被害
- 第9週 ジャーナリズムの倫理
- 第10週 戦争とジャーナリズム
- 第11週 ソーシャルメディアとオールドメディア
- 第12週 アーカイブズとジャーナリズム1(概論)
- 第13週 アーカイブズとジャーナリズム2(事例)
- 第14週 ニュースを評価してみる
- 第15週 情報の保全と公開

タイトルこそ「近現代のジャーナリズム」ではあるけれど、メディアリテラシーとアーカイブズの課題を取り入れている。内容を見ると、メディアの成り立ち、読み方からはじめ、その後にアーカイブズとのつながりを2週にわたって論じており、これも参考にさせていただくことにした。

次に「アーカイブズ」と「メディアリテラシー」の共通点は何かを考えた。言うまでもなく、情報を扱っていることである。そして、伝えるべき重要な点の一つには、情報が民主主義社会を支える土台(インフラ)であるということがあつたと気付いた。

2020年度のシラバスは以下のようにした。

アーカイブズとメディアリテラシー ―新聞記者の視点から―

授業のテーマ

新聞やテレビって何のためにあるのでしょうか。「みんなに必要な情報を届けるため」。そう言ってしまうは簡単ですが、そもそも「マス」から「個」へと指向が変わりつつある時代に「みんなが必要とする情報」ってあるのでしょうか。新聞もテレビも見なくなつて、インターネットがあれば十分という人もいますでしょう。本当にそうなの？ 素朴な疑問を基に、少しずつ考えを深めていきませんか。

授業における到達目標

民主主義社会における情報の意味を理解し、必要な情報を手に入れるためには、何を選び、どんな行動を取ったらよいのか。自分の頭で考え、行動できるようになることを目指す。

授業の内容

- 第1週 マスメディアって何（はじめに）
- 第2週 新聞記事ができるまで
- 第3週 新聞記事の読み方
- 第4週 新聞とテレビ
- 第5週 ジャーナリズムの倫理と公共性①
- 第6週 ジャーナリズムの倫理と公共性②
- 第7週 実名報道の意味
- 第8週 ソーシャルメディアとマスメディア
- 第9週 アーカイブズって何
- 第10週 公文書は自分と関係があるのか。誰のものか
- 第11週 情報公開制度のなかった時代の公文書
- 第12週 情報公開制度の成立・可能性・限界
- 第13週 情報公開請求入門
- 第14週 アーカイブズ活用の課題
- 第15週 まとめ

いきなり「新聞もテレビも見なくなつて、インターネットがあれば十分という人もいますでしょう」などと、あえて刺激的な言葉をぶつけて、反応を見てみようと思った。また二つのテーマの教える順については、よりなじみのありそうな「メディアリテラシー」を前半、「アーカイブズ」を後半に置いてみた。

メディアリテラシーを教えるに当たっては、実務家教員としては新聞を中心に据えるべきだろうと考えた。

後半の「アーカイブズ」は極めて広い概念だが、民間の文書まで考えるよりは、まずは「公文

書」を基本に据え、2011年施行の公文書管理法を抱く現代として、法の趣旨に沿って行政がその意思を決める過程は記録し、後々の検証を受けなければならないこと。それがないことでこれまで、どんな支障があったのかを考えてもらうことにした。さらに、公文書はインターネットでも手に入れることはできるけれど、自分にとって関心のあること、切実な身近な問題を決める公文書を手に入れる方法——すなわち情報公開制度を知っておいてもらうことが市民として大事なことだろうと考えた。また日々のニュースで伝えられている「森友・加計学園」を巡る公文書の破棄の話などを「つかみ」にしてみた。

迎えた初年度をいきなり新型コロナウイルス禍が襲った。2020年度春の授業は4月に始まらず、ほぼ1カ月遅れとなり、連休明けからオンラインで始まった。私自身 Zoom を使うのも初めてだった。しかも教職員間の勉強会で試行してみたところ、丸々90分（当時）、画面を前ににらめっこしては、聞く側は耐えられないという話が出た。そこで、Zoom の視聴は授業の半分程度としてもらい、残りは自習や小テストなどで補ってもらうことにした。

学生と直接会うことができないのはとても不安だった。果たしてどれだけ話が伝わっているのかも分からず、課題やレポートを通じて接するしかなかった。より大変だったのは学生のみさんだったろう。貴重な2年間の短大生生活をコロナにむしばまれ、しかも学習の機会を事実上奪われた中で、それでも課題に答えてくれた学生たちがとても尊く感じた。

2年目の2021年前期（水曜1限）は「新聞のできるまで」をやめた。新聞記者が実務家教員をやる際によく取り上げるテーマだが、小中学校で新聞社を社会科見学することも減っており、新聞の製作過程に社会的な関心も減っている。1年目の授業でも反応が薄かった。中途半端に説明しても、学生にはイメージが湧かず、かえって新聞（＝オールドメディア）だと誤解されかねないと考えた。

その代わり、マスメディアとソーシャルメディア（SNS）の共通点と相違点、テレビと新聞の共通点と相違点の基本の最低限のところを理解してもらうことに注力することにした。

前者ではマスメディアはプロの作り手、SNSは誰でも書けることから始めた。プロが作るマスメディアが記事を発信するには、その根拠となる取材を積み重ねることが必要で、責任と倫理観が土台にあること・SNSはスマートフォンさえあれば誰でも情報発信でき、極めて速度が速いが、真実性を担保するものがなく、うのみにできないこと・日本のSNSは匿名で発信することが多く、それがさらに責任を薄めていること・SNSには、類似した考え方の人の情報を入手しやすくなるため、自分に近い考え方に触れやすく、そうした情報が正しいものだと思い込む傾向（フィルターバブル）が生まれやすいことを理解してもらうことに力を注いだ。

後者では、テレビは放送法に縛られていること、新聞にはそうした制約がないことが制作過程で大きな違いをもたらしていることを理解してもらうようにした。

「情報公開請求入門」も取りやめた。公文書の開示を求める情報公開請求は、市民の権利として重要なものではあるが、権利の行使には責任が伴う。自分にとって何が必要な公文書なのか

分からない段階で、公開の方法だけを教えても意味がなく、またむやみに公開請求をすることを促すのは無責任ではないかと考えたからだ。

2021年度も、またしてもコロナが授業のじゃまをし、7割程度がオンライン（Zoom）による授業となった。それでも学生と教室で話す機会を初めて得られた。授業アンケートによる評判は平均以下であったが、興味を持ってくれる学生の中には「分かりやすかった」とわざわざ伝えてくれる人もいた。メディアに関する分野は興味を持つ人、持たない人によって、大きく差が出ることを思い知った。

3年度目、2022年度前期（水曜1限）のシラバスは以下ようになった。

授業のテーマ

ニュースや情報は、インターネット、テレビ、新聞といったメディアを通じて伝わる。伝わってくる情報が正確か、自分にとって意味があるか、見分ける力が必要になる。こうした力を身につけるために、ニュースの作り手がどのような意図で情報を選び集めているのか、さらにメディアごとの特徴を解説していく。また、公文書や先人の残した記録を「アーカイブズ」と言うが、それらの活用も求められるだろう。アーカイブズの作成・保存はなぜ大切か、きちんと残されているかも学ぶ。実際のニュース報道や解説文などを読みながら、一緒に考える場にしたい。

授業における到達目標

民主主義社会における情報の意味を理解し、ネット時代に必要な情報を手に入れるためには、何を選び、どんな行動を取ったらよいのか。日本や欧米の情報の流れを把握したうえで、自分の頭で考え、他者の考えを尊重しながら行動できるようになることを目指す。

授業の内容

- 第1週 マスメディアとは、どんなものか？
- 第2週 ニュースはどうやって取材しているのか？
- 第3週 新聞とテレビはどう違う？
- 第4週 なぜ歴史や戦争を伝えるのか？
- 第5週 ジャーナリズムの倫理って何だろう？
- 第6週 メディアと情報源
- 第7週 実名報道は必要なのか？
- 第8週 ソーシャルメディアとマスメディア
- 第9週 アーカイブズって何
- 第10週 公文書は自分と関係があるのか。誰のもの？
- 第11週 情報公開制度のなかった時代の公文書
- 第12週 情報公開制度の成立・可能性・限界
- 第13週 アーカイブズ活用の課題
- 第14週 まとめ

参考書

藤田博司ほか：ジャーナリズムの規範と倫理 [新聞通信調査会、2014 年]

江川紹子ほか：記者のための裁判記録閲覧ハンドブック [新聞通信調査会、2020 年]

原寿雄：ジャーナリズムの可能性 [岩波書店、2009 年]

榎澤幸広ほか：公文書は誰のものか？ [現代人文社、2019 年]

この年度は幸いなことに 14 回全てが対面授業となった。各回の課題に沿って、手書きのテキストを作り、それを読んでもらいながら授業を進めた。パワーポイントなどを使わず、あくまで自作のテキストや新聞・雑誌記事のコピーを教材にした。インターネットが安価・高速化し、動画の視聴が日常化する中で、あえてまとまったテキスト（文章）を読む習慣をつけることがメディアリテラシーの第一歩であると考えたからだ。より客観的に物事を伝える役割を果たすテキストの重要性を認識し、テキストを読む力を身につけることをこの授業の目標の一つにした。

ただ、感染した学生や就職活動で休む学生が出て、メンバーがそろうことが少なかった。今年度は受講者が 20 人を切ったこともあり、選択式の小テストによる評価をやめ、評価はミニレポートと授業終了後のレポートの計 3 回で評点を付けることにした。

高校の授業の倍の 100 分間、授業を聞き続けるのはなかなか大変である。女子短大という均一した学生集団では、質問の時間を設けてもなかなか手が上がらない。朝一番の午前 9 時開始で、最初から全員がそろわないことも考えられた。

そこで 100 分を、導入の 20 分、本題の 50 分、別題の 30 分に三分割して、それぞれ別のことを話すことにした。授業の冒頭の導入の 20 分には、当日もしくは過去数日の新聞の中からメディアリテラシーを理解するうえで助けになりそうな記事のコピーを 2〜3 部ずつ配布。5 分間くらい黙読してもらった後で、記事の書かれた経緯や意図を解説した。ときにはあえて記事を批判的に語ることもした。その中では、なるべく過去の回の復習につながる題材を選ぶように心がけた。

本題でシラバスの課題を教えた後、学生が飽きてきたころの終盤の 30 分程度には、2022 年度から、米国の高校生向けの漫画を交えたジャーナリズム（記事作成の過程と記者倫理）の教材「A Newshound's Guide to Student Journalism」を利用した。この教材では、高校の新聞部に入った生徒が学校新聞で特ダネをものにするために必要な取材とは何か、取材の倫理とは何かといったテーマごとに、ドラマ仕立てで具体的な説明を試みている。(Paron and Guelfi 2018)

米国の高校生向けであるが実践的で理解がしやすく、日本では数少ない「ジャーナリズム学科」を持つ専修大学文学部の授業でも使われていると聞く。平易な英語であり、英語力を養成するうえでも有益だと感じた。

3 年目の授業で、情報公開と報道との関係について触れる機会があった。それは、菅義偉政権崩壊の舞台裏を報じた朝日新聞の記事（2021 年 9 月 10 日朝刊 1 面、2 面）を配って読んだことがきっかけだった。記事は業界で「内幕モノ」と言われるもので、政権の実力者がどんな思惑で、どう動いたかを検証した記事だった。かつてはこうした記事が書けてこそ一人前の記者だと

みなされることがあった。しかし、日本では政治家の内幕は記録に残っていない。従って、実力者がなんらかの思惑を持って発した言葉の検証は不能だ。

この記事は、よく読むと二階俊博・自民党幹事長（当時）の胸の内を中心に構成され、「二階氏周辺に都合良く書かされたのではないか」という見方ができた。そうなのであれば、二階のような人物の言ったことで歴史が作られてしまう。

こうしたことを防ぐためには、重要な政策・政局の決定過程を記録に残し、すぐにではなくても後年に公開するルールを作る必要があることを教えた。そうすれば政治家が簡単にうそをつくことができにくくなることも合わせて伝えた。

こうした現実在即した授業をすることで、少しではあるが、アーカイブズとメディアリテラシーという二つのテーマの連関を語るできるようになってきたと感じている。

3. 対話は？

授業では、対話を心がけていたが、うまくいっているとは言えない。積極的に授業に参加してくれる学生はなかなか現れない。

午前9時開始の授業に間に合うように、早い人では午前6時台に家を出ていると聞くが、なかなか手を上げてくれない。「この問題はAと思うか、Bと思うか」などと択一式なテーマを設定すると、ようやく挙手してくれる。

授業後も少し残って質問を受け付ける旨、言っているのだが、質問をしてくれる学生はいなかった。「次回は就職活動で休む」という連絡か、「教室の空調が効いていない」という苦情にとどまり、忸怩たる思いでいる。

やむを得ずミニレポートなどの形で、意見を聞いてみた。的確に理解したうえ、しっかりとした意見を持っている学生もいて感心することもあった。それを授業中にできないのか、悩ましく思っている。

4. 来年度に向けた課題と考察

「アーカイブズ」を学ぶ意義について、高校を出たばかりの学生が受け止めるのは、なかなか難しそうだ。高校で日本史や世界史を学んだとしても、原典に当たるような機会はなかっただろうし、国立や都道府県立の公文書館にアクセスするのはハードルが高そうだ。

教室はWi-Fi環境が整っているうえ、ほぼ全員がスマートフォンやタブレット端末しているようだ。「アジ歴（国立公文書館アジア歴史資料センター）」のホームページにアクセスしてもらい、特定の資料を探して読み解いてもらうこともよいのではないかと考えている。

メディアリテラシーについても、テレビ朝日の毎月の報道番組審議会の要約映像がホームページに上がっているのを、折に触れて視聴してもらい、放送と自律について考えてもらう機会を作ってはどうかと考えている。メディアリテラシーを巡っては、メディアを批判・批評的に眺め

るだけではなく、弱体化する「マスメディアを育てる」ことも今後は重要になっていくのではないだろうか。内容のすぐれた番組を検証する取り組みなどについても講義の中で触れたらどうかと検討している。

また、実際の記事を見て考えるうえでNHK ラジオ第二「ニュースで学ぶ『現代英語』」を活用してはどうかとも考えている。実際に使われたニュース原稿を利用しているので、メディアリテラシーを学ぼうと重要事項が登場する。たとえば、2022年9月15日放送の「モデルナ ファイザーなどを提訴」では、訴訟を伝える記事は「中立」であることが重要で、必ず双方の主張を伝えていることや、断定する表現をとらず、「〇×が言った」「〇×が主張した」と主語をつけて報じていることを学ぶことができる。ウェブ上にテキストがあり、ネットを利用すれば放送時間の後で学習できる。もちろん英語の学習として効果がありそうで、「一石三鳥」な教材だ。

2022年10月中旬時点では、以下のような構成で授業を展開できないかと模索している。

授業の内容

第1週 メディア～民主主義の土台となる情報をつなぐ装置

＜情報を発信者から受け手に届ける「メディア」が民主主義社会の形成に重要な役割を果たしていること。新聞・テレビに代表されるマスメディアとそれ以外の違い＞

第2週 新聞とテレビ (1) ニュースをどう取材し伝えているのか

第3週 新聞とテレビ (2) 報道の自由と規制。中立ってなんだろうか

第4週 新聞とテレビ (3) なぜ歴史や戦争を伝えるのか

第5週 ジャーナリズムの倫理、情報源はどこまで示すべきか

第6週 実名報道の意義と限界

第7週 情報のゲートキーパーとしてのマスメディア 意義と限界

第8週 インターネットの特徴と限界～マスメディア化するのか

第9週 アーカイブズとは何か～情報の記録・保存・活用

第10週 「官」の記録＝公文書は誰のものか

第11週 公文書をつかう (1) 情報公開制度のなかった時代の公文書管理

第12週 公文書をつかう (2) 情報公開制度の成立・可能性・限界

第13週 アーカイブズ活用の課題

第14週 まとめ

『マスメディアとは何か』(稲増 2022)を新たに参考文献に加え、講座で十分に論じ切れていなかったインターネット、特にソーシャルメディア(SNS)の位置づけを再考して、第8～9週を改良したいと考えている。

改良したいことは他にもある。松岡の意図をくむとともに、「アーカイブズとメディアリテラシー」の科目名に沿って、私自身のアーカイブズ学への習熟度が上がってきた段階で、アーカイ

ブズを先に教えることができないかも検討課題としてみたい。アーカイブズは現代を生きる上で必要なものだとすることを強調することにもなりうる。

科目名の大幅な変更も考慮してよいのではないか。「メディアと現代の記録」というのが実態に即しているし、学生にも分かってもらいやすい。

もちろん科目名にこだわってばかりではいけない。今を生きる学生にマスメディアやインターネットとの付き合い方を知り、公文書を中心とする記録の大切さを理解できるように少しでも力になりたいと考えている。

今後とも本学教員のみなさまのご指導、ご助言を頂く機会をいただけたら幸いである。

〔参考文献〕

メディアリテラシー関係

- 藤田博司・我孫子和夫, 2014, 『ジャーナリズムの規範と倫理』新聞通信調査会
原寿雄, 2009, 『ジャーナリズムの可能性』岩波書店
稲増一憲, 2022, 『マスメディアとは何か』筑摩書房
松本創, 2021, 『地方メディアの逆襲』筑摩書房
NHK取材班, 2020, 『AI vs. 民主主義』NHK 出版
Paron, Katina and Javier Guelfi, 2018, *A Newshound's Guide to Student Journalism*, McFarland
佐藤卓己, 2008, 『テレビ的教養』岩波書店
山中速人, 2009, 『娘と話す メディアってなに?』現代企画室

アーカイブズ関係

- 榎澤幸広 (他), 2019, 『公文書は誰のものか?』現代人文社
学習院大学 a, 2022, 「アーカイブズ学演習」, シラバス
[https://g-port.univ.gakushuin.ac.jp/campusweb_gk/slbssbdr.do?value\(risyunen\)=2022&value\(semekikn\)=1&value\(kougicd\)=U320408201&value\(crclumcd\)=2442017000](https://g-port.univ.gakushuin.ac.jp/campusweb_gk/slbssbdr.do?value(risyunen)=2022&value(semekikn)=1&value(kougicd)=U320408201&value(crclumcd)=2442017000) (最終閲覧日: 2022 年 11 月 15 日)
- b, 2022, 「記録管理と組織」, シラバス
[https://g-port.univ.gakushuin.ac.jp/campusweb_gk/slbssbdr.do?value\(risyunen\)=2022&value\(semekikn\)=1&value\(kougicd\)=U810707101&value\(crclumcd\)=2442017000](https://g-port.univ.gakushuin.ac.jp/campusweb_gk/slbssbdr.do?value(risyunen)=2022&value(semekikn)=1&value(kougicd)=U810707101&value(crclumcd)=2442017000) (最終閲覧日: 2022 年 11 月 15 日)
- c, 2022, 「記録保存と現代」, シラバス
[https://g-port.univ.gakushuin.ac.jp/campusweb_gk/slbssbdr.do?value\(risyunen\)=2022&value\(semekikn\)=1&value\(kougicd\)=U810706101&value\(crclumcd\)=2442017000](https://g-port.univ.gakushuin.ac.jp/campusweb_gk/slbssbdr.do?value(risyunen)=2022&value(semekikn)=1&value(kougicd)=U810706101&value(crclumcd)=2442017000) (最終閲覧日: 2022 年 11 月 15 日)
ほんとうの裁判公開プロジェクト, 2020, 『記者のための裁判記録閲覧ハンドブック』新聞通信調査会
瀬畑源, 2011, 『公文書をつかう』青弓社
新藤宗幸, 2019, 『官僚制と公文書』筑摩書房
松岡資明, 2010, 『日本の公文書』ポット出版